

<第11回世界レジャー会議>

第11回世界レジャー会議（韓国 春川）体験記

田中伸彦¹

Report on the World Leisure Congress and Leisure Games, ChunCheon 2010

Nobuhiko Tanaka¹

1. はじめに

以下に記す原稿は、筆者が世界レジャー会議へ出席するきっかけから始まり、実際に会議で体験した内容までをまとめたものである。

国内学会である日本レジャー・レクリエーション学会は、国際組織である世界レジャー会議とは密接な関係を保ちつつ、学会運営にあたっている。しかしながら、会員によっては、世界レジャー会議への参加、発表はまだまだ距離感のある活動であるかもしれない。

そのため、この世界レジャー会議へ遅ればせながら初参加をした筆者が、体験記を学会誌に投稿し、プロセスを記録に残しておくことにした。つまり、この様な体験記が、次回（於：イタリア・リミニ）以降の会議への参加の手助けになるのではないかと考え、以下に寄稿する次第である。

2. 韓国からの訪問者

時は、2008年11月に遡る。新潟医療福祉大学で行われた第38回日本レジャー・レクリエーション学会大会に、突如韓国から来客が訪れた。2010年の夏に韓国・春川で開催される世界レジャー会議の来訪誘致のためのPR活動をしに来たのである。2010年といえばまだ2年も先の話であった。

彼らは、会議が開かれる2年も前に、日本人の誘致に向けて、20数ページもある日本語に翻訳された美しいパンフレットを携えて日本にやって

きたのである。さらに、彼らは日・英・韓国語に対応したPR用DVDを持参していた。大会実行委員会は、急遽このDVDを大ホールで上映する時間を作り、大会参加者は皆で美しい春川の街並み・自然風景の映像を堪能した。

これが、私と第11回世界レジャー会議（韓国 春川）との最初の出会いであった。「韓国ならそれほど遠くないし時差もない。海外旅費の申請が上手くいかなくとも自費で十分行ける。」と参加を決意した次第である。

3. 発表要旨提出などの事前準備

発表要旨の提出期限は2010年1月、世界レジャー会議の7ヶ月前であった（その後、締め切りは延長されて3月末となった）。要旨は英文で500ワードまでとのことであった。とりあえず自分で要旨を書き上げ、念のため校閲者に見てもらった（費用は数千円程度）。そして、（当初の）期限の前日、世界レジャー会議の公式ホームページにオンライン投稿を行った。形式はポスター発表を選択した（口頭、ポスターのいずれかの発表形式を選択できた）。

投稿された要旨は、レビューを受ける規定になっていた。その結果は4月の中頃に戻ってきた。世界レジャー会議開催の4ヶ月前であった。判定はAccepted（発表可）であった。発表できることが決まったので、初夏に早期振込割引制度を使って入会金（50 USD）、参加費（フル参加 340 USD）

1 東海大学観光学部
School of Tourism, Tokai University

をクレジットカードで支払った。今回、世界レジャー会議の参加費の早期割引期限は、開催のほぼ1ヶ月前、7月20日までであった。

参加登録後は、渡航の準備、発表用ポスターの作成、ポスターの縮刷版（配付用）の印刷などを行った。一点、後手に回ってしまったのはホテルの確保である。春川市は『冬のソナタ』の影響で有名な都市ではあるが、人口30万弱の中都市に過ぎない。そのため、8月に入って会議の公式ホームページに掲載されているホテルにあたったところ、満室で予約できなかった。

この会議の参加者だけでも数千人規模で、それに競技大会の関係者、一般の観光客などもいることを考えると、ホテルが満室なのも至極当然であることにその時初めて気がついた。

幸い、楽天トラベルなど、国内のインターネット旅行業者のデータベースを駆使し、素泊まりの宿が確保できたが、市内に泊まれるかどうか、まさに綱渡りの状態だった。

4. 世界レジャー会議への参加

1) 春川への行程

会議は2010年8月28日（土）～9月2日（木）の6日間にかけて開催された。私は8月23日（月）～8月28日（土）まで、ちょうど韓国のソウルで開催されていたIUFRO（世界森林研究機関連合）の世界大会に出席していたため、陸路春川に向かった。8月の土曜日ということもあり、ソウル発春川行き的高速バスはなんと6時間待ちで使えず、特急列車も非常に混んでいた。特急の指定席は全くとれず、車両連結部にずっと立ちっぱなしの列車移動となった。

結果、疲労を癒やすため、28日の19時から開催されたグランドオープニングは欠席し、私は29日朝のオープニング&キーノートスピーチから参加することにした。

2) 会議（基調講演・口頭発表・ポスターセッション）

会議は、春川市郊外に位置する江原大学で行われた。今回の世界レジャー会議のメインテーマは「レジャーとアイデンティティ」であった。サブテーマとして「レジャーと文化アイデンティティ」、「レジャーと民族アイデンティティ」、「レ

ジャーと全地球・地域アイデンティティ」の3つを掲げ、各々のサブテーマにちなんだ基調講演、口頭発表セッション、ポスターセッションが開催されていた。多くの講演やセッションは同時並行で開催されたため、筆者は基調講演を中心に会議に参加することとした。

基調講演の演者はLOHASで有名な Carl Honore 氏、『マクドナルド化する社会』の著者である George Ritzer 氏（写真1）、ヒュンダイ（現代）

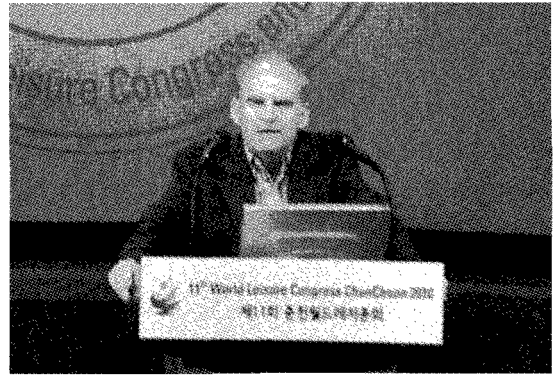


写真1 George Ritzer 氏の講演

自動車元社長の Kun-Shik Cho 氏など蒼々たるメンバーが名を連ね、非常に貴重な講演を拝聴することができた。たとえ自分が発表しない場合でも、これらの基調講演を連日拝聴するだけで、大会参加費や旅費の元は十分取れるとって過言ではないコンテンツが連日続いた。

口頭発表のセッションは特定のテーマに関心を持つ人が集まった。多くても数十名程度の集まりであった。そのため、自分の関心と近い研究

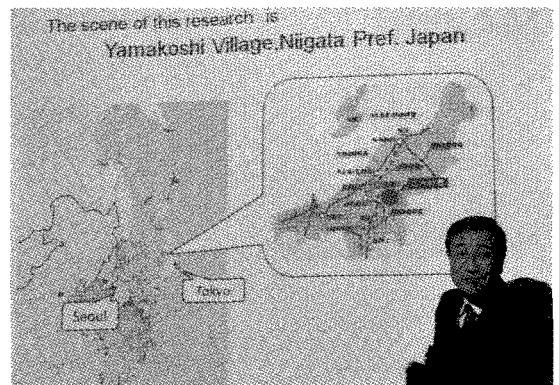


写真2 Leisure and Culture 会場で口頭発表を行う西野仁 学会理事

テーマを持っている他国の研究者との親交を深めるには絶好の機会であると考えられた。筆者は Leisure and Culture など、いくつかのセッションに参加した（写真2）。

ポスター発表は、交代制で連日行われた。大会受付もあるビル（写真3）入り口のすぐ横のホールが会場であった。ほぼ毎回日本人のポスター発表があったため、ポスター会場は日本人同士の様々な情報交換の場ともなっていた。

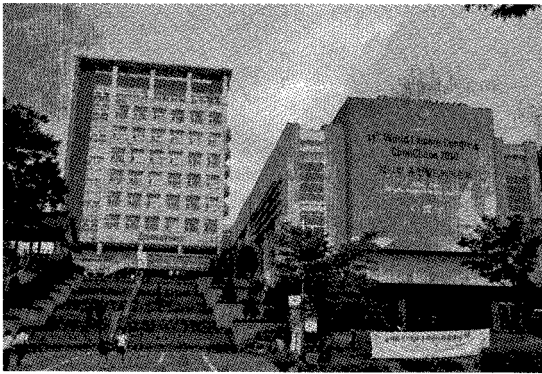


写真3 大会受付や各種発表が行われた
メインビルディング

朝から夕方まで、講演やセッションは続いたので、熱心に話を聞いていると一日中大学の外に出ないことになる。そのため、会議参加者には昼食券が配布され、大学の食堂（カフェテリア）で昼食を自由にとることができた。（写真4）



写真4 大学カフェテリアでの昼食風景

3) フィールド・ワークショップ

8月31日の午後は、大学における公演やセッションは一切行われずに、フィールド・ワークショップと称するインコングレスツアーが開催され

た。ツアーコースは全部で7種類で、選択制だった。市内観光と称する手軽なツアーから、国立博物館見学ツアー、アニメーション美術館ツアー、フェスティバシアター「MIME」見学、博物館や『冬のソナタ』のロケ地として有名な南怡島（ナミソム）ツアーなど幾つかの選択肢があった。筆者は、一番遠いフィールドであった北朝鮮との国境の非武装地帯（DMZ）の見学ツアーを選択した。ちなみに、このツアーの選択は、事前に参加費を振り込む際に決めておく必要があった。

午後2時に大型バス乗り込み、揺られること数時間、開発などが行われないため豊かな自然が残されている国境付近に到着した。北朝鮮が韓国に向けて秘密裏に掘ったトンネル内部を実際に見学するなど貴重な体験ができた（写真5）。また、軍人との交流の中で国際的なレジャーの普及・新興には「平和」というキーワードが重要であることを現実に体感できた（写真6）。

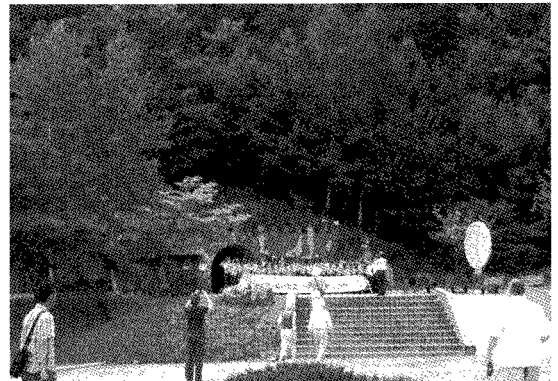


写真5 南北朝鮮国境付近に掘られたトンネル



写真6 レジャー会議参加者と韓国軍隊の人たちとで共同記念撮映をするとともに：
レジャーには平和が大切

4) サイドイベントなど

国際会議は学術的な交流だけにはとどまらない。初日のウェルカム・ディナーでは、国際色豊かな食事が提供されると共に、食事をしながら韓国の民俗芸能を楽しむことができた（写真7）。



写真7 ウェルカム・ディナーで披露された韓国民俗芸能

さらに、上述のとおり、今回の会議と同時並行の形で、春川市内で国際レジャー競技大会や展示会が開かれていた。そのため、会議場と競技場を結ぶ無料シャトルバスを利用して、江原大学の会議場を抜け出して半日程度水上スキーの観戦（写真8）や、アウトドアグッズ展示場の見学を行った。



写真8 水上スキーの競技会の観戦風景

また、春川市はタクカルビ（牛ではなく鶏肉のカルビ）やマックス（そば粉を使った冷麺の一種）という郷土料理で有名である。会議のディナーなどで、それらにお目にかかることができ

なかった筆者は、春川市街のタクカルビ料理店街に自主的に赴き、それらの食事を自主的に堪能した（写真9）。

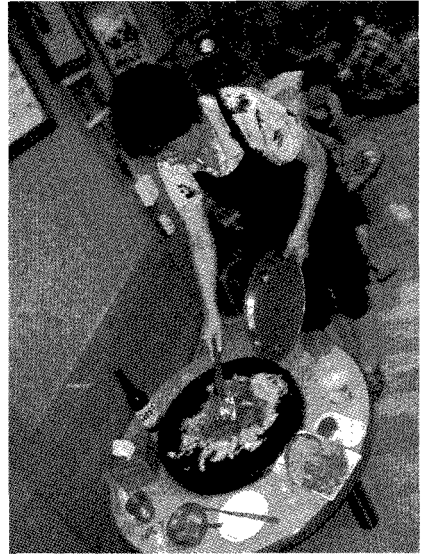


写真9 春川市名物のタクカルビをつくってもらう

なお、筆者は出席しなかったが、会議期間中はガーラ（GALA）ナイトやフェアウェル・パーティーなど、アフターファイブのプログラムも実に充実していた。そのため、筆者のように単独で参加してしまった結果、えてして手持ちぶさたになりかねない人間であっても、暇を持って余すということは無いスケジュールであった。

5. おわりに

以上、簡単ではあるが筆者が体験した世界レジャー会議の内容を紹介した。この会議は原則2年に1度開催されている。今回は上述のとおり、2012年にイタリアのリミニで開催される。また、この会議の開催者である世界レジャー機構（WLO）は、今回の様な学術集会のほかにも、大規模な国際見本市である「国際レジャー・エキスポ」なども主催している。

日本レジャー・レクリエーション学会の会員がそれらの会議等に足繁く参加し、学問としてのレジャーの国際化が今後も推進されていくことを望みつつ、今回は筆を置くことにする。